

『聖なる娼婦』

木村克彦

(作新学院大学助教授)

阿佐谷の名曲喫茶・ヴィオロンで演じられた朗読劇を、今度は、学会大会の場において観る機会に恵まれた。

今回は大学講堂の低い舞台が、舞台である。椅子が中央に意味ありげに据えられていた。登場人物たちは、舞台正面の低い階段を登ることで登場した。彼らは私たちのなかから、舞台上上がったわけである。登場人物は、私たちの中の幾人かであり、私たち自身である。私たちは、自分自身の心の中の葛藤を、舞台に見ることになるかもしれぬ。

まず、黒のフロックコートを身に纏い、胸に向日葵の花を挿した、オスカー・ワイルドが現われた——「確かにそうです。あなたが自分自身の信仰に誰かを改宗させたとき、あなたは自分の信仰を自分では信じなくなるのです……」——ワイルド——ピアボウム・トゥリー——ヘスキス・ピアスン——荒井良雄という繋がりを経て、私たちは本劇の大筋を、舞台空間の助けを借りて、作者自身の口から聴くことができました。特にヴィオロンにおいては、荒井氏は顔のマークや髪も含めて、ワイルドの扮装をなさっていて、やや暗めの照明と相俟って、作者その人の image が眼前に鮮烈に浮かび上がっていた。

それに第1の男、第2の男の台詞が続く。これから何かが、もしかすると(悲劇的な)何かが起こるやもしれぬという、多少の緊迫感をもって2人のやりとりがなされた。そのテンポは、ヴィオロンにおける方が速く感じられたが、出演者自身によると、そのような意図はなかったとのこと。おそらく会場の広さの違いで、そのように感じたのであろう。また、2人の男のやりとりは、幾分鄙びた感じを伴って読まれた——「……時には地面がえらく堅いことだっでございます」——2人の平民の感じが良く出ており、次に紫のヴェールを身に纏い登場された会田由来さん演ずるミリーナとの、身分の違いが、より明確にされたように思うし、ミリーナの妖艶さを一層、際立たせていたようにも思えた。また会田氏は、2人の男を見回しながら朗読されたが、2人の方はミリーナの「なぜ、おまえたちまで、私を見ないのです」の台詞通り、終始うつ向き加減であった。これは、上述の身分の違い、更には、後のホノーリアスのつれない態度や、(悲劇的な)結末をも予見させるものであった。最後に逢見明久氏演ずるホノーリアスが登場した。白の上衣で首には銀の十字架を掛けていた。氏はすぐに舞台左手奥(洞窟)にひっ込んだ。氏は「ホノーリ

アスを呼ぶのは誰だ——なぜ私を呼ぶ」の台詞で舞台中央に登場し、ミリーナの誘いを拒絶する台詞が、威厳をもって、ゆったりとしたテンポで読まれた。「……主は天国へ連れて行ったのだ」の台詞を残し、再び奥にひっ込んだが、そのひっ込み方も巧みで、実に「すげない」ものであった。

また次のミリーナの台詞だが、ヴィオロンの時とは、改変がなされていて、様々な装飾的な言葉もまじえた長広舌で男を誘惑する台詞(サロメのそれを想わせる)が、「……あんな奇妙な口のきき方をしたのかしら」の後に入れられていた。そして、この長い誘惑の台詞の後に、ホノーリアスの「ミリーナ、私の目から鱗が落ちて、今まで見えなかったものがはっきりと見えるようになった」の台詞が来るのである。また会田氏も「……水夫たちと一緒に座る」の台詞を言うと、紫のヴェールを椅子の上に掛けてしまい、その後の残りの誘惑の台詞も、どこかはかなげに読まれた。このあたりで逢見氏が再び登場したのだが、その首に既に十字架はなく、前述の脱がれたヴェールの上に、その十字架は置かれてしまう。「目から鱗が」の台詞と相俟って、ホノーリアスの改心が明確に表現された。これは、真にワイルドの言うように、改心させようとしながら、自説に懐疑的になってしまったことを表している。実に巧みな演出と言えよう。また逢見氏は、ホノーリアスの「まるで子供のようないやうだね……」の台詞の前に、「アハハ」と高笑いを挿入されたが、そのあけすけな笑い方は、氏が演出ノートに記されている「自由な想像力の無さ」を、象徴的に上手く表現されたものに思えた。最後はまた、荒井氏扮するワイルドの説明で終幕となったが、私は、氏がやはりヴィオロンで朗読された「忠実な友」の最後の言葉「そして私も全く同感なのです」が、聴衆に視線を向け語りかけるように朗読されたとき、虚構と現実がひとつになった印象を受けたことを思い出した。こちらでも、即ちワイルドと朗読者は、ひとつであったろう。

